

カズの書道講座 (四)

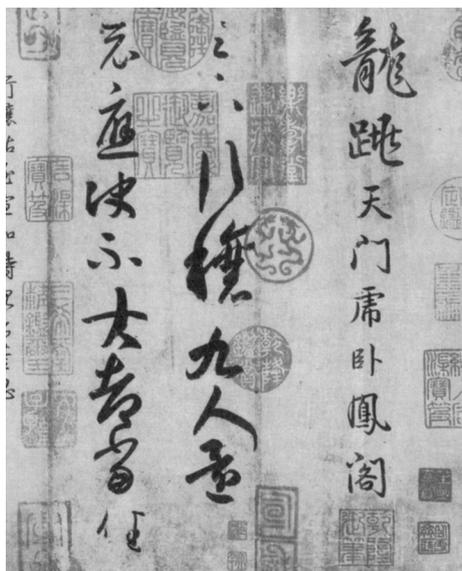
実技に入る前に・その三

古典の王様

本年三月三日まで開催された『書聖 王羲之』展では「大報帖」という新発見があり、山内溪華さんも四月号の臨書課題に取り上げて下さいました。補足でも触れましたが「行穰帖」も日本では二度目（初公開は平成十五年に大阪市立美術館で開催された「海を渡った中国の書」展）の展示で、今展の目玉の一つでした。拓本も多数展示されていましたが、やはり喪乱帖や孔侍中帖の双鉤填墨された作品に目を引かれます。

ご存じでしょうか、二〇一〇年十一月に北京で開かれたオークションで、王羲之の「平安帖」が約三八億七〇〇〇万円という金額で落札されました。

「平安帖」は四十一文字ですから、換算すると一字が九四〇〇万円を越える金額となり、ここでも王羲之は書道史の王様でした。



王羲之「行穰帖」

古典の見方・空臨

さて、古典がすばらしいということは理解できますが、実際自分の眼で見て、どこがすばらしいと感じるか、それは難問です。

例えば、動物園に行つて猿をじっくり見ていると、段々顔の違いが分かり、更に観察しますと、個々の特徴の違いも分かるようになります。

古典も同様に考え、とにかくじっくり見えていますと、線の弾力や勢い、また筆の動きが伝わって来ます。同時に自分が書き手になったつもりで、なぞつて書いてみますと、どんな筆を使っているのだろう、どんな墨を使っているのだろうなどと、様々な思いも馳せて来ます。つまり頭の中で臨書をするのです。こういう臨書を私は空書くうしよに対して「空臨」と呼んでいます。

このような見方で各展覧会に行き、同じ様に現代の書作品をなぞつてみますと、古典とは全く違った運筆が感じられ、且また古典のすばらしさや品性を知ることが出来ます。

ですから、古典を理解しようとするには、古典の作品を展示する特別展ばかりではなく、現代の書展も見て比較することが大切です。更に実際に書いて反復臨書をすれば、一層眼や腕が培われていくということは、自明の理です。

書の誤解

書も絵画と同じく平面へいめんで表現するものですが、絵画の物を対象として色彩で表現することにに対し、書は文字を対象として紙の白と墨の黒で表現します。書の実技では、黒で形成される文字をいかに表現するかを、解説したいと思つていますが、あと二つ、誤解というか問題がありますので、それを申し上げます。実技に入りたいと思ひます。

その一つは「読めない」ということです。「読めないから解らない」と思っている人は結構多いですよ。書の多くは漢詩を書きますから、学ばなければ活字でも読めません。しかもそれを草書・隸書・篆書・変体仮名などの書体を用いて書きますので、更に読めなくなつてしまします。しかし、たとえ読めなくても、書体は書における歴史の財産ですから、伝統を継承する上では当然使用しなければなりません。書は形のある文字を表現するものと理解すれば、敢て読めなくてもよいのです。

もう一つは「意味」ということです。よく「何て書いてあるんですか。どういう意味ですか」と聞いてくる人、やはり多いですよ。確かに文字には意味がありますが、書は文字の形だけを対象にして表現しますので、意味とか内容は無視して書きます。書にとつて文字は、表現するための素材と考えればよいでしょう。

海外の歌を考えて下さい。言葉も意味も解りません。最近では日本の歌も解らなくなりましたが、鑑賞は出来るのではないのでしょうか。絵画において、りごの画を描いても中身の味までは解りません。書は文字の造形を表現するものなのです。

※注1 よく平面芸術と言いますが、書は芸術と言つてよいのか、そもそも芸術とはどういうものか、私には理解出来ていませんので、芸術という言葉は極力避けています。

※注2 読めればそれに越したことはありませんが、せめて自分が書いた作品くらいは読めるようにしてもらいたいです。